

カナダのアウトドアスポーツにおける 持続可能な観光開発の取り組みについて

—アウトドアスポーツ・ツーリストのプレイスアタッチメントと環境態度・行動に着目して—

上杉杏* 工藤康宏**

抄録

日本において自然資源を活用した観光開発は産業の重要な柱として注目を集めている。外国人旅行者の旅行先として選定理由となる地方の観光資源は「自然資源」であることも報告されている。特に地方における自然地域の開発は観光客の都市集中を地方へ拡散できると期待されている。しかし現在の日本は、持続可能な自然資源の活用という側面では先進諸国から遅れをとっている。持続可能な観光システムに加え観光客の環境に対する意識も低いレベルにある。アウトドアスポーツ参加は自然地域におけるツーリストの環境に対する意識を醸成させる機会となると考えられる。そこで、本研究では、持続可能な観光開発の先進国であるカナダの持続的スポーツツーリズム開発に関する事例を収集し、今後の日本の地方におけるアウトドアスポーツツーリズム開発のための基礎資料を提供すること、そして、日本の自然地域におけるアウトドアスポーツ・ツーリストを対象に、プレイスアタッチメントと環境配慮行動、再訪意向との関係を明らかにすることを目的とした。

二次資料の収集とバンフ国立公園、ジャスパー国立公園におけるフィールドワークよりカナダの国立公園における持続的なレジャー・レクリエーション開発に関する中核的な政策として、生態系と利用者の衝突を防ぐゾーニング、環境意識を醸成させる教育的プログラム、そして ROS 理論に基づいたコンフリクトマネジメントがあげられた。

日本のアウトドアスポーツ・ツーリストに関する質問紙調査は、土地の90%が森林で覆われている福井県の池田町に位置するアウトドアレジャー施設における日本人利用者を対象とした。質問項目は個人的属性、情報源、来訪頻度、場所愛着、環境配慮行動、再訪意向を網羅した。先行研究に従って、2つのコンセプト（場所同一性、場所依存性）を図るプレイスアタッチメント尺度を採用し、環境配慮行動と再訪意向に与える影響を構造方程式モデリングによって検証した。その結果、アウトドアスポーツ・ツーリストの池田町に対する感情的な愛着レベルである「場所同一性」よりはむしろ機能的な愛着レベルである「場所依存性」がその地域への環境配慮行動、再訪意向に影響を及ぼすことが確認された。

キーワード：アウトドアスポーツ，持続可能な観光開発，スポーツツーリズム

* 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 〒270-1695 千葉県印旛郡印西市平賀学園台 1-1

** 順天堂大学スポーツ健康科学部 〒270-1695 千葉県印旛郡印西市平賀学園台 1-1

The efforts of Canada's sustainable outdoor sport tourism development

—Focusing on effects of place attachment on pro-environmental behavior of outdoor sport
tourists—

An Uesugi * Yasuhiro Kudo **

Abstract

Tourism especially utilizing natural resource is drawing attention as a key pillar of the industry in Japan. It is reported that the needs for nature as a local tourism resource is very strong and is a decisive reason for selecting local destinations in Japan. Developing nature areas, especially in the rural areas, can diffuse the concentration of tourists from the city to rural areas. But Japan lags behind developed countries such as North America in tourism utilizing natural resources under the idea of sustainability. Both the system of sustainable tourism and tourists' interest in environment are at a low level in Japan. It is considered that outdoor sports are effective as an opportunity to become interested in the environment.

The purpose of this study was to collect the case of Canada's national park which developed the idea of sustainability and consider how to promote sustainable tourism utilizing sport in Japan, and to examine the effect of place attachment to local natural resource to pro-environmental behavior and revisit intentions through outdoor leisure.

Collecting data from secondary sources and fieldwork in Jasper national park and Banff national park, there are some efforts that continuously utilize nature as sport tourism resources: zoning, interpretive program, tourist's conflict management.

The paper survey's sample of Japanese outdoor sport tourists consisted of Japanese visitors to outdoor leisure facility located in Ikeda-town Fukui-prefecture in Japan, which is covered by 90% forest. The questions on this survey included the following topics: personal attributes, information sources, visit frequency, place attachment, place-related pro-environmental intentions, and revisit intentions. Following previous research, we employed a place attachment scale designed to measure two concepts (Williams, 2000): place dependence (i.e., a functional attachment) and place identity (i.e., an emotional attachment). The effects of place attachment on pro-environmental behavior and revisit intentions was examined using a structural equation model. Results showed that outdoor sport tourists' functional attachment rather than emotional attachment to Ikeda-town were associated with their place-related pro-environmental behavior and revisit intentions.

Key Words : Outdoor sport, Sustainable development, Sport tourism

* Juntendo University, Graduate School of Health and Sports Science, 1-1 Hiraka-gakuendai, Inzai-shi, Chiba 270-1695 JAPAN

** Juntendo University, Faculty of Health and Sports Science, 1-1 Hiraka-gakuendai, Inzai-shi, Chiba 270-1695 JAPAN

1. はじめに

日本政府は、日本を「観光先進国」への新たな国づくりに向け、訪日外国人旅行者の受け入れ環境整備を積極的に行っており、「2020年までに訪日外国人旅行者を4,000万人に」という目標を掲げ、インバウンド・ツーリズムの振興を、現在の少子高齢化社会である日本における成長戦略の一つとして位置づけている。なかでもスポーツツーリズムが注目を浴びており、東京マラソンといった都市型マラソンイベントはすでに国内外から多くの参加者の獲得(2014年大会出走者総数35,797人、外国人出走者数5,317人; 上杉・工藤, 2015)に成功しているが、訪日外国人スポーツツーリストの都市部への集中からは未だ脱却できていない。日本の豊かな自然の活用、特に地方の自然資源を活用したアウトドアスポーツ、レジャーが高い潜在力を持ち、都市部集中の解決策につながると期待されている。日本政府観光局(2016)によれば訪日外国人旅行者の旅行先として選定理由となる地方の観光資源は「自然資源」であることが報告されている。自然資源を活用したアウトドアスポーツやレジャーが地方におけるインバウンド拡大、国内観光振興、地域活性化につながることが期待されるとともに持続可能な開発目標(SDGs)の視点に立った持続的な開発が重要である。しかし現在の日本は、持続可能な自然資源の活用という側面では先進諸国から遅れをとっている(村田, 2012)。自然地域におけるレジャー・レクリエーションを活用した持続可能な観光開発に取り組んでいる先進国として、カナダが挙げられる。カナダは2000年からカナダスポーツ観光連盟(CSTA)を設立しスポーツツーリズム先進事例として認識されている。カナダは国土の約半分が森林を占め生活資源はもとより、レジャー資源としても活用されている。カナダは持続可能な観光開発に対する国家行政を中核とした統括管理システムが構築されており、8億7400万ドルが個人や自然保護グループメンバーから寄付されている(Federal, Provincial, and Territorial Governments of Canada, 2014)ことから、管理システムの構築に加え、住民の自然資源の保護や持続的な活用に対する意識が高いことがわかる。日本において、社会・経済・環境における持続可能な観光開発を目指すためには、先進国の取り組みを参考にしつつ、事業者だけでなく、地域住民やツーリストの持続可能な観光開発に対する意識の醸成が課題であり、住民やツーリストの場所への愛着(プレイスアタッチメント、以下PAとする)の醸成が、一つの解決の糸口になると考えられる。

PAとカナダの国立公園訪問者の環境配慮行動には関係があること(Halpenny, 2010)、スポーツは人々に場所への愛着を醸成させる影響力がある(Higham & Hinch, 2009)ことなどが報告されている。アウトドアスポーツへの参加がスポーツツーリストのPAを醸成し、自然環境に対する意識付けを促進させるツールとなりうることが推察される。自然資源を活用した持続可能なスポーツツーリズム実現には、アウトドアスポーツ参加とPAの醸成との関係を明らかにすることが重要であると考えられる。

2. 目的

本研究は、持続可能な観光開発の先進国であるカナダの持続的なスポーツツーリズム開発に関する事例を収集し、今後の日本の地方におけるアウトドアスポーツツーリズム開発のための基礎資料を提供すること(研究I)、そして、日本の自然地域におけるアウトドアスポーツ・ツーリストを対象に、PAと環境配慮行動、再訪意向との関係を明らかにすること(研究II)を目的とした。

3. 方法

3.1. 調査方法

研究I：日本での資料収集に加え、アルバータ大学において図書館での資料収集、同大学有識者へのヒヤリングから、カナダの国立公園における持続可能な観光開発に関する体制、施策、取り組みの整理を行った。また、ジャスパー国立公園とバンフ国立公園を対象として、アウトドアスポーツプログラムや公園管理運営における環境保護や持続可能な開発に関わる取り組みについて現地でのフィールドワークを行った。

研究II：本調査は、2018年11月17、18日に福井県今立郡池田町の「ツリーピクニックアドベンチャーいけだ」(以下、TPAとする)において配票回収法による自記式質問紙調査を行った。調査票の回収数は146部であった。調査項目は、個人的属性、TPA来訪回数、PA、再訪意向、環境配慮行動等を設定した。PAに関する項目は、Williams(2000)を参考にし、池田町へのPAに関する12項目を「1. まったく当てはまらない」から「5. 大いに当てはまる」の5段階尺度で測定した。環境配慮行動に関する項目は、Halpenny(2006)を参考にし、池田町の自然地域における環境配慮行動に関して今後1年でどの程度実行可能性があるかを「1. まったく当てはまらない」から「5. 大いに当てはまる」の5段階尺度で測定した。PA、環境

配慮行動を測定する尺度に関しては、できるだけ忠実な日本語を作成するため、事前にバックトランスレーションを行い、質問項目を作成した。バックトランスレーションは、著者とスポーツツーリズムを専門とする教員1名により、各尺度を日本語訳し、英語表現により近いものを採用した。その後、英訳に精通する教員1名により修正が行われ、その作業を何度も繰り返すことで、日本語と英語の等価性を保つことにより、邦訳尺度を作成した。

3.2. 分析方法（研究Ⅱ）

はじめに、PA 尺度・環境配慮行動尺度の妥当性と信頼性を検討した。妥当性の検討では、因子構造を把握するため、探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行い、次に確認的因子分析を行った。信頼性の検討では、Cronbach の α 係数の算出を行った。その後、得られた因子構造から他の尺度との相関分析を確認した。そして、日本の自然地域におけるアウトドアスポーツ・ツーリストのPAと環境配慮行動および再訪意向の関連性を明らかにするために、共分散構造分析を用い検証した。分析には、IBM SPSS Statistics 20とSPSS Amos 18.0を用いた。

4. 結果及び考察

4.1. カナダの持続的な観光開発事例（研究Ⅰ）

二次資料の収集とバンフ国立公園、ジャスパー国立公園におけるフィールドワークより得られたカナダの国立公園における持続的なレジャー・レクリエーション開発に関する中核的な政策は以下の通りである。

一つ目は、ゾーニングである。自然環境の保全とレジャー・レクリエーション利用の両立を図るため、土地をゾーン（区域）によって分割する手法のことである。カナダの国立公園におけるゾーニングシステムは、ゾーンⅠ「特別保護地区（Special Preservation）」ゾーンⅡ「原生地域（Wilderness）」ゾーンⅢ「自然環境地域（Natural Environment）」ゾーンⅣ「アウトドアレクリエーション（Outdoor Recreation）」ゾーンⅤ「パークサービス（Park Services）」の5つの区域（ゾーン）に分かれている。ゾーンによってアウトドアスポーツ活動や自動車のアクセスの制限が決まっており、生態系と利用者の衝突（例えば、野生動物とツーリストの遭遇など）に対応している。日本の国立公園においてもゾーニングの制度があり「特別保護地区」「第1種特別地域」「第2種特別地域」「第3種特別地域」「普通地域」の区分があるが、風景や生態系の保護が中心でありアウトドアレクリエーション利用の

観点からのゾーニングは行われていない。

二つ目は、利用者の環境意識を醸成する教育的プログラムである。カナダの国立公園の目的の一つに「カナダの自然環境や文化に関する教育機会の提供」とあるように、利用者の自然への環境意識を醸成するため、各国立公園の特色に合わせた教育的プログラムが展開されている。子供のころから自然に触れ合う場を提供するため、「Learn-to-Camp」といった無料で身近にキャンプの仕方を子供たちに体験してもらうプログラムや、公園内の野生動物や自然を採集するスタンプラリー、自然環境に関する知識等を教えてくれるガイド付きのウォーキングツアーなど、子供や家族に対し自然についてレジャー・レクリエーションを通して体験し学ぶプログラム（インタープリティブプログラム）が展開されている。幼少期における自然体験は、自然に対する環境意識の醸成や成人してからの自然地域への来訪行動が期待されることから、子供を対象とした自然におけるアウトドア活動や教育プログラムの提供は持続可能な開発において重要な取り組みであると考えられる。

最後に、レジャー・レクリエーションに対する多様なニーズを持つ利用者に対応する政策である。ジャスパー国立公園・バンフ国立公園の利用者数は、夏季（2017年8月、バンフ国立公園：674,800人、ジャスパー国立公園：468,300人）と冬季（2017年11月、バンフ国立公園：123,200人、ジャスパー国立公園：43,100人）で大きな格差があり、夏季の国立公園における混雑とそれによる生態系への影響だけでなく、利用者同士の衝突（例えば、スキー場におけるスキーヤーとスノーボーダー）に対応した取り組みが必要となる。特に利用者数が多い国立公園では自然環境の保全だけでなく、訪問者の自然体験の質の保全に対応した整備が重要である。自然資源におけるレジャー・レクリエーションへのツーリストのニーズは多種多様である。トレイルにおけるハイカー、バイカー、ホースバックライダーなど、利用形態によってトレイルの通行を制限することによって利用者間の衝突を防ぎ、利用者の満足度向上を図っている。また、アメリカ発祥の概念としてROS（Recreational Opportunity Spectrum）理論（Clark & Stankey 1979）がある。空間をどこでも同じ状態に管理するのではなく、自然におけるレクリエーションの場として、人の手が加わっていない原生的なエリアから快適性が高い都市的な自然エリアを好み多様なニーズを持つ利用者に対して、自らの望みに見合うような機会を提供しようというものである。この概念はジャスパー国立公園・バンフ国立公園でも

適用されている。ジャスパール国立公園ではバックカントリーにおけるキャンプやハイキングといったレクリエーション活動エリアとして「Semi-primitive」「Primitive」「Wildland」の3つに分けて整備を行い利用者が求める多様なニーズに対応している。

4.2. 日本の自然地域におけるアウトドアスポーツ・ツーリストのPAと環境配慮行動、再訪意向（研究Ⅱ）

4.2.1. アウトドアスポーツ・ツーリストの基本的属性

表1は、本研究のアウトドアスポーツ・ツーリストの基本的属性を示したものである。性別は、男性が53.8% (n=78)、女性が46.2% (n=67) であり、平均年齢は32.4歳であった。年収は、301~700万円が45.5% (n=61) が最も多かった。居住地は、8割以上が県外からの来訪であった。同伴者の平均人数は3.72人であり、友人との来訪が半数であった。宿泊形態は、池田町内での宿泊が23.1% (n=33)、池田町外での宿泊が32.9% (n=47)、日帰りが40.6% (n=58) であった。旅行形態はTPAへの訪問のみが50.7% (n=71)、池田町内の観光を含んだ来訪が7.9% (n=11)、福井県内の観光を含んだ来訪が27.1% (n=38)、福井県外の観光を含んだ来訪が14.3% (n=20) であった。TPAへの訪問のみを目的に池田町に来訪し、宿泊を伴わずに帰る旅行形態が約半数であった。

表1. アウトドアスポーツ・ツーリストの基本的属性

変数	%	(n)	変数	%	(n)
【性別】			【同伴者】		
男性	53.8	(78)	自分ひとり	0.7	(1)
女性	46.2	(67)	家族・親族	17.2	(25)
【年齢】			夫婦・パートナー	20.0	(29)
20歳未満	4.1	(6)	友人	51.7	(75)
20代	50.7	(74)	職場の同僚	10.3	(15)
30代	17.1	(25)	【TPA来訪回数】		
40代	19.9	(29)	初来訪	89.0	(130)
50代以上	8.2	(12)	2回目以上	11.0	(16)
【居住地】			【宿泊形態】		
福井県内	17.2	(25)	池田町内宿泊	23.1	(33)
福井県外	82.8	(120)	池田町外宿泊	32.9	(47)
【年収】			池田町内・外宿泊	3.5	(5)
300万円以下	40.3	(54)	日帰り	40.6	(58)
301~700万円	45.5	(61)	【旅行形態】		
701~1,000万円	9.7	(13)	TPA訪問のみ	50.7	(71)
1,000万円以上	4.5	(6)	池田町内観光含む	7.9	(11)
			福井県内観光含む	27.1	(38)
			福井県外観光含む	14.3	(20)

4.2.2. PA、環境配慮行動尺度の作成

PA尺度12項目、環境配慮行動尺度11項目のそれぞれに探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行い、日本の自然地域におけるアウトドアスポーツ・ツーリスト尺度を作成した。

4.2.2.1. PA

PA尺度12項目に対して探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行い因子構造を把握した。その結果、固有値1以上の基準で2因子が抽出され、累積寄与率は51.1%であった。これら因子分析結果に基づき、因子負荷量が0.3未満の項目3項目を除いた9項目について再び同じ方法で探索的因子分析を実施した。その結果固有値1以上の基準で2因子が抽出され、累積寄与率は58.4%で約6割を説明するものであった（表2）。先行研究と同様な結果が得られたため、因子名を場所同一性（Place Identity）、場所依存性（Place dependence）とした。続いて行った確認的因子分析の結果は、 $X^2 = 38.7$, $df=26$, $p = .052$, $GFI=.930$, $AGFI=.879$, $CFI=.972$, $RMSEA=.068$ であり、あまり適合度の良いモデルを示さなかった。

表2. プレイスタッチメントの因子分析結果

因子と項目	因子負荷量		Mean	S.D.
	1	2		
場所同一性 ($\alpha=.894$)				
池田町は私にとってとても大切である。	.843		2.70	1.14
池田町は私にとって重要な意味を持つ。	.836		2.40	1.20
池田町はなじみの場所である。	.792		2.08	1.17
池田町は私の一部のような気がする。	.787		2.22	1.27
池田町に強く親近感を感じる。	.774		2.84	1.23
池田町を訪問することは私自身を雄弁に物語る行為である。	.525		2.30	1.18
場所依存性 ($\alpha=.750$)				
他の地域よりも池田町へ訪問する方が満足する。		.850	2.89	0.74
他の地域でアウトドアスポーツを行うよりも池田町でやることは重要である。		.796	2.81	0.99
池田町のような場所は他にない。		.542	3.07	1.03
	因子相関	—		
		.469		

4.2.2.2. 環境配慮行動

環境配慮行動（Pro-Environmental Behavior : PEB）11項目に対して探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行い因子構造を把握した。その結果固有値1以上の基準で3因子が抽出され、累積寄与率は58.4%であった。これら因子分析結果に基づき、因子負荷量が0.3未満の項目2項目を除いた9項目について再び同じ方法で探索的因子分析を実施した。その結果固有値1以上の基準で3因子が抽出され、累積寄与率は65.1%であった（表3）。続いて行った確認的因子分析の結果は、 $X^2 = 46.2$, $df=24$, $p<.01$, $GFI=.911$, $AGFI=.834$, $CFI=.948$, $RMSEA=.094$ であり、本尺度においてもあまり良い当てはまりを示さなかった。

表3. 環境配慮行動 (PEB) の因子分析結果

因子と項目	因子負荷量			Mean	S.D.
	1	2	3		
PEB1 ($\alpha=.887$)					
池田町または似たような地域の自然環境の保全・管理に関する市民集會に参加する	.956			2.3	1.16
池田町または似たような地域、自然地域の自然を守る事業に自分の時間を割いて参加する	.852			2.5	1.09
池田町や似たような環境保護地域の自然環境保護支援への投書を行う	.815			2.5	1.15
池田町のような地域の自然環境保護を確実にを行うための寄付を行う	.603			2.90	1.18
友人・知人に池田町または似たような地域を訪れた際には、ごみ削減やごみ拾いを行うよう促す	.578			3.1	1.18
PEB2 ($\alpha=.828$)					
環境被害の回復のためなら、自ら進んで、公園等のよく利用する場所へ訪れるのを控える	.918			2.8	1.01
環境被害の回復のためなら、自ら進んで、公園等のよく利用する場所の利用を減らす	.746			2.8	1.09
PEB3 ($\alpha=.706$)					
池田町の自然環境への理解を深める	.747	3.6		1.02	
池田町や似たような環境保護地域の自然環境保護支援に署名する	.697	3.56	1.12		
因子相関	—				
	.232	—			
	.454	.252	—		

4.2.3. モデルの検証

PA と環境配慮行動それぞれを構成する因子、来訪回数、再訪意向との Pearson の積率相関係数を算出したものが表4である。PA を構成する場所依存性 (PD) においては環境配慮行動と再訪意向との相関がみられるが、場所同一性 (PI) とそれら項目との間には相関がみられなかった。日本の自然地域におけるアウトドアスポーツ・ツーリストの PA と環境配慮行動および再訪意向の関連性を明らかにするために共分散構造分析を行った。Halpenny (2016) は、来訪頻度が PA に影響を及ぼし、PA は再訪意向に影響を及ぼすことを明らかにしている。また、PA は環境配慮行動にも影響を及ぼすことが明らかになっている (Vaske & Kobrin, 2001)。そこで、まず、TPA 来訪頻度から PA2 因子、PA2 因子から環境配慮行動、再訪意向への影響を仮定したモデル (モデル1) を検証した。その後、5%水準で有意な値を示さなかったパスを削除したモデル (モデル2)、さらに修正指数を基に誤差間の相関を認めるモデル (モデル3) の検証を行った (図1)。表5は各モデルの適合度を示している。モデル3が、AGFI、RMSEA に関して基準値が満たされていないが、検証可能範囲内 ($X^2=21.2$ 、 $df=13$ 、 $GFI=.949$ 、 $AGFI=.889$ 、 $CFI=.923$ 、 $RMSEA=.078$) と判断した。日本の自然地域におけるアウトドアスポーツ・ツーリストでは、環境配慮行動、再訪意向ともに、PA を構成する因子である場所依存性が影響していることが明らかとなった。さらに、PA は来訪頻度が影響していることが明

らかとなった。二宮は場所同一性を“ある特定の場所に対する態度、価値、志向、信念、意義、行動傾向の組み合わせによって特徴づけられる感情的な愛着レベル”、場所依存性を“ある特定の場所が代替の場所と比べて個人のニーズをどれくらい満足させるのかという知覚レベル”と説明している。本研究ではこの知覚レベルの場所依存性が環境配慮行動、再訪意向それぞれに影響を及ぼしていることがわかった。今後、地方においてアウトドアスポーツを活用して持続的に地域活性化を図るには、他の自然地域との差別化や利用者の特定の地域に対してのニーズを把握して開発を進めていくこと、何度も訪れてもらうための工夫が必要だと考えられる。アウトドアスポーツ参加を通してその地域への愛着や再訪意向が高まり、環境意識の醸成が促されることが推察される。これらの結果から、自然地域の持続可能な観光開発における自然資源を活用したアウトドアスポーツツーリズム推進の有用性が示唆された。

表4. 相関分析

	来訪回数	PI	PD	PEB1	PEB2	PEB3	再訪意向
来訪回数	1	.28**	.20*	-.11	.12	-.06	.09
PI	.28**	1	.42**	.10	.02	.01	.07
PD	.20*	.42**	1	.18	.04	.27**	.31**
PEB1	-.11	.10	.18	1	.24*	.40**	.15
PEB2	.12	.02	.04	.24*	1	.28**	.12
PEB3	-.06	.01	.27**	.40**	.28**	1	.37**
再訪意向	.09	.07	.31**	.15	.12	.37**	1
Mean	1.17	2.42	2.92	2.66	2.81	3.57	4.26
SD	0.66	0.97	0.76	0.96	0.97	0.94	0.82

表5. プレイスアタッチメントが環境配慮行動、再訪意向に影響を及ぼす各モデルの適合度

	X^2	df	GFI	AGFI	CFI	RMSEA
モデル1	49.4	12	.893	.749	.652	.173
モデル2	51.0	14	.890	.779	.655	.159
モデル3	21.2	13	.949	.889	.923	.078

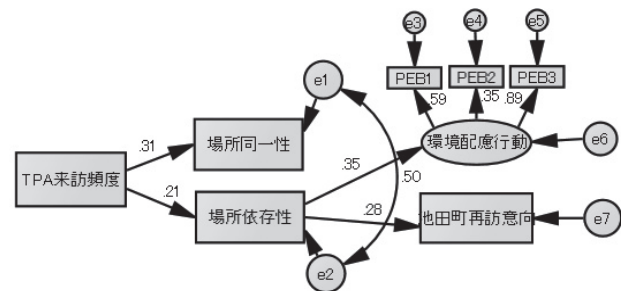


図1. 構造方程式モデリングによる結果

5. まとめ

カナダにおいて国立公園は有用な観光資源として位置付けられ、自然資源を持続可能に活用するためのガイドラインが設けられている。こうしたカナダの国立公園を代表とする自然を基盤としたスポーツツーリズムにおける持続可能な開発に向けた取り組みは今後の日本の地方におけるアウトドアスポーツツーリズム開発の参考となる。また、日本において今後アウトドア資源の持続的な開発を進めていくうえで、本研究では日本の自然地域におけるアウトドアスポーツ・ツーリストのPA及び環境意識の現状を把握することができたが、本研究の対象施設であるTPAが運営を開始して3年弱と、愛着を持つには歴史が浅いこと、また、本研究で用いたPA・環境配慮行動尺度は、北米を中心とした自然環境に対する意識が高いツーリストに対して測定された尺度であったため、文化的違いから本対象者にはなじみのない行動を測定するものであった。今後、世界的にSDGsが推進されていくなかで、日本のアウトドアスポーツ・ツーリストの環境意識がどのように変化していくかを明らかにすること、また日本人に適応したPA・環境配慮行動尺度を構築していくために、本研究を今後も継続していくことが重要である。

【参考文献】

- Clark, R. N., & Stankey, G. H. (1979). The Recreation Opportunity Spectrum: a framework for planning, management, and research. Gen. Tech. Rep. PNW-GTR-098. Portland, OR: US Department of Agriculture, Forest Service, Pacific Northwest Research Station. 32 p, 98.
- Federal, Provincial, and Territorial Governments of Canada (2014) 2012 Canadian Nature Survey: Awareness, participation, and expenditures in nature-related recreation, conservation, and subsistence activities. Ottawa, ON: Canadian Councils of Resource Ministers.
- Halpenny, E. A., Kulczycki, C., & Moghimehfar, F. (2016). Factors effecting destination and event loyalty: examining the sustainability of a recurrent small-scale running event at Banff National Park. *Journal of Sport & Tourism*, 20(3-4), 233-262.
- Halpenny, E. A. (2010). Pro-environmental behaviours and park visitors: The effect of place attachment. *Journal of Environmental Psychology*, 30(4), 409-421.
- Halpenny, E. A. (2006). Environmental Behaviour, Place Attachment and Park Visitation: A case study of visitors to Point Pelee National Park. *UWSpace*.
- Higham, J., & Hinch, T. (2009). *Sport and tourism: Globalization, mobility and identity*. Routledge.
- 村田周祐 (2012) スポーツ・ツーリズム研究の現代的再構成. *体育学研究*, 57:471-482.
- 日本政府観光局 (2016) 訪日外国人旅行者の消費動向とニーズについて
https://www.jnto.go.jp/jpn/projects/research_consulting/cq6g7o000002hw5-att/project_data.pdf (参照日 2019年2月25日)
- 二宮浩彰. (2010). プロスポーツ・ファンの地域愛着とスポーツ観戦者行動. *スポーツ産業学研究*, 20(1), 97-107.
- Parks Canada (2010a) Management Plan-Jasper National Parks of Canada, <https://www.pc.gc.ca/en/pn-np/ab/jasper/info/plan/~media/60AD908E2DD54879A22B93A001C8BD81.ashx> (参照日 2019年2月25日)
- Parks Canada (2010b) Management Plan-Banff National Parks of Canada, <https://www.pc.gc.ca/en/agence-agency/bib-lib/plan/s/~media/93410FC71A114BE29C7C5F1B8F27AC43.ashx> (参照日 2019年2月25日)
- 上杉・工藤 (2015) 日本の市民マラソンにおける外国人参加者の実態調査. 日本生涯スポーツ学会第17回大会 (口頭発表)
- Vaske, J. J., & Kobrin, K. C. (2001). Place attachment and environmentally responsible behavior. *The Journal of Environmental Education*, 32(4), 16-21.
- Williams, D. R. (2000). Notes on measuring recreational place attachment. https://www.fs.fed.us/rm/value/docs/pattach_notes.pdf (参照日 : 2019年2月25日)

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。